向島ニュータウン
まちづくりビジョン

誰もが活き活きと暮らせる向島ニュータウン
～暮らし心地を誇れる「多文化・多世代共生」のまち～

向島ニュータウン
まちづくりビジョン検討会

平成29年3月

目　次　構　成

１　向島ニュータウンまちづくりビジョン策定趣旨 ･･････ 1

２　向島ニュータウンまちづくりビジョン全体像 ･････････ 3

３　向島ニュータウン概要 ･･････････････････････････ 4

４　向島ニュータウンの現状・課題と資源 ･･････････････ 7

５　向島ニュータウンのまちづくりの方向性 ･････････････ 17

６　取り組んでいく方針・テーマなど ･･････････････････ 19

７　推進体制 ･･････････････････････････････････････ 68

８　資料 ･･ 71

１　向島ニュータウンまちづくりビジョン策定趣旨

向島ニュータウンは昭和 52（1977）年 4 月に入居が開始され，本年で 40 年が経過する住宅市街地です。周辺の農地や緑の多さなどの自然環境の豊かさ，公園や子育て支援拠点，団地ならではの人の温かさがあるなどの住宅地としての良さがあります。

また，住民活動についても，これまでから各学区の自治会や各種団体を始めとして，民生・児童委員協議会や社会福祉協議会（二の丸北学区 H10.6.21 設立，向島二ノ丸学区 H26.6.29 設立，向島藤ノ木学区 H27.9.13 再開），医療機関・福祉施設，また向島駅前まちづくり協議会や京都文教大学（京都文教大学マイタウン向島（ＭＪ））などにおいて学区・地域の活動が取り組まれており，更には学区・地域を越えて連携した活動を行うための試み等もなされてきています。

その一方，向島ニュータウンも全国の同時期に建設されたニュータウンと同様，人口減少・少子高齢化が急激に進行しており，地域全体の活力低下も見られます。また，市営住宅等施設では老朽化が進み，設備や仕様が時代に合わなくなっているところや有効活用が図れていないところなど，まちの持続可能性に関わる課題が現れてきています。

向島ニュータウンは，京都市において良好な住宅・住宅地を供給するために必要なインフラ整備が行われている住宅市街地であり，住民の方々誰もが活き活きと暮らせる環境づくりに取り組むとともに，若者・子育て世代も移り住みたくなるようなまちづくりを行うことにより，次世代にしっかりと引き継いでいくことが必要です。

また，約 10 年前の平成 18（2006）年 11 月に，いち早く「まちづくりビジョン」を策定した洛西ニュータウンでは，洛西ニュータウン創生推進委員会等の地域が主体となったまちづくり活動が取り組まれてきているという状況もあります。

これらの状況を踏まえ，向島ニュータウンの活性化を目指したビジョンを策定することとし，平成 28（2016）年 4 月，京都市により，「向島ニュータウンまちづくりビジョン検討会」が設置され，専門的な見地及び地域の住民や事業者の方々の立場から，幅広く意見を求めながら検討を行ってきました。

検討会では，7 つの「ワーキンググループ（以下，WG という。）」，「向島ニュータウンのこれからを話し合う集い」（以下，話し合う集いという。），「向島中学校生徒との座談会（以下，中学生座談会）」，「向島ニュータウンまちづくり通信（以下，まちづくり通信という。）」の発行・配布などを行い，向島ニュータウンの現状・将来の課題や資源などを確認しながら，ありたいまちの姿やこれから取り組んでいくべきことなどについて議論を重ねてきました。

この「向島ニュータウンまちづくりビジョン」（以下，ビジョンという）は，検討会の議論だけでなく，WG，話し合う集い，中学生座談会，まちづくり通信を通し寄せられた住民意見なども踏まえ，今後目指すべきまちの姿，また，概ね今後 4 年間（平成 29 年度～32 年度）にどのような取組を緊急に，重点的に行う必要があるのかについて住民・事業者・行政等が協働して取り組むことについてまとめ，策定したものです。

なお，このビジョンにはすぐに取組を始められるものだけでなく，目指すべきまちの姿を実現するために，ビジョン検討の中で住民・事業者から出されたアイデアや今後検討や調整が必要なものなども含め，記載をしています。今後の取組を進める中で，これらについても引き続き検討，議論がなされ，可能な限り実現させていくことが期待されます。

また，このビジョンの取組期間は４年間ですが，「将来を展望した土地利用等の見直し」について記載していることからも，この期間経過後もまちづくりの取組は継続されるべきものであることは言うまでもありません。４年後のビジョンの見直しについては，今後の「推進体制」において議論されることになりますが，その時点の地域の状況や社会情勢を踏まえて，新たに取り組むべき方向性，内容が地域住民や事業者が主体となって検討できるような体制が，地域において整備されていることが期待されます。

２　向島ニュータウンまちづくりビジョン全体像

Ⅰ　ビジョン策定の趣旨など

向島ニュータウンの概要

・事業手法　一団地の住宅施設（京都市住宅供給公社施工）
・入居開始　昭和 52（1977）年 4 月
・面積　74.7ｈａ
・計画戸数・人口　6,810 戸・22,500 人
・建設戸数　6,565 戸（市営 4,257（64.8%），ＵＲ624 戸，分譲（高層）1,441 戸，分譲（戸建）243 戸）
・現世帯数・人口※　5,968 世帯・12,464 人
（割合※　15 歳未満 9.0%（市 11.0%），65 歳以上 36.4%（市 25.8%））※平成 27 年国勢調査

ビジョン策定の趣旨・計画期間

・入居開始から 40 年が経過し，人口減少・少子高齢化が急激に進行し，地域全体の活力の低下も見られるため，向島ニュータウン（及び向島地域）の活性化に向けて地域一丸となって目指すまちの姿・方針等について取りまとめるものです。
・地域住民・団体，事業者，行政等で組織された「向島ニュータウンまちづくりビジョン検討会」が平成 28 年度末に策定
・計画期間は平成 29（2017）～32（2020）年度の 4 年間
・関連計画：伏見区基本計画（H23（2011）～32(2020)年度），京都市住宅マスタープラン（H22（2010）～31(2019)年度）

Ⅱ　向島ニュータウンの課題と資源

	課　題	資　源
① 人口・ 地域力	・市平均を上回る人口減少・少子高齢化の進行 ・公営住宅の割合が高いことに伴うコミュニティミックスの困難さ ・困難を抱える親やその子ども達への支援の必要性 ・中国帰国者等のコミュニティへの参画の不足　等	・各街区・学区等における様々な住民活動（各街区の集い事業や防災活動など住民が繋がる場，中国帰国者による自主グループ活動など） ・多文化・多世代（異なる国籍や文化的背景を持つ住民，留学生，大学生等）の交流　等
② まちの機能・ 公共施設	・公共施設（建物・設備），公営住宅の老朽化 ・公営住宅の空き家の増加 ・公園や共用施設の魅力の低下 ・街区・学区を越えて集える拠点の不足　等	・向島学生センターによる国際色のある環境 ・小中一貫校創設による教育環境の魅力向上 ・活用可能な公営住宅の空き家 ・小中学校敷地等の活用　等
③ 利便性・ 暮らし心地	・高齢者・障害者等の買い物環境改善の必要性 ・向島駅前における賑わいの不足（飲食店等） ・中国帰国者等や視聴覚障害者への防災情報発信等対応（多言語化等）の不足　等	・地域包括ケアを目指す医療介護事業所の連携 ・子ども食堂や学習支援の取組 ・活用可能な空き店舗　等
④ 立地性・ 場所	・高齢者・障害者等の生活上の移動の困難さ ・向島のイメージ付けのための情報や魅力発信の不足　等	・向島城などの歴史文化 ・巨椋池などの豊かな農業や景観 ・近鉄電車による市内や大阪への交通至便性　等

Ⅲ　目指すまちの姿　※ここで言う　「多文化」には，国際的な文化だけでなく，障害者等，様々な方々の多様な生活文化も含みます。

誰もが　活き活きと暮らせる　向島ニュータウン

～暮らし心地を誇れる「多文化※・多世代共生」のまち～

地域の力を引き出し，高め合いながら，一人ひとりの住民や住民組織・地域団体，事業者，教育機関，行政など，向島ニュータウンに関わる全ての主体がそれぞれの役割を持って共に連携・協働して，目指すまちの姿の実現に取り組みます。

地域の魅力発信による イメージ付け
歴史や文化を活かした魅力の向上・情報発信
方針１

一人ひとりを大切にし，賑わいもあるまちづくり
子育て世代や高齢者など誰もが安心して活き活きと暮らせるまちづくり・商店街等の賑わいづくり
方針２・３・４・５・６

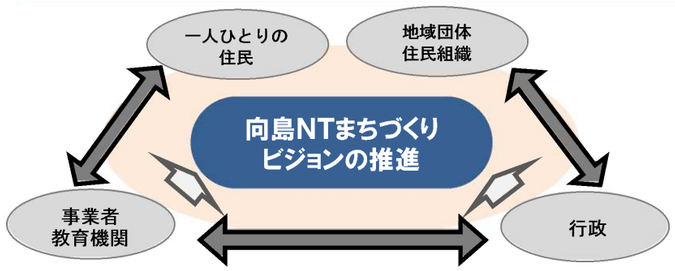
向島ＮＴ（地域）の将来を展望した土地利用等の見直し
小中学校敷地を始めとする用地の活用のための土地利用計画の見直しや住宅全体のあり方の検証
方針７

・若者・子育て世代も移り住みたくなる魅力あるまちへ
・高齢者・障害者・中国帰国者等も安心して住み続けられるまちへ
・全ての世代が支え合い，次世代にバトンをつなげる，地域コミュニティの充実したまちへ

Ⅳ　取り組んでいく方針・テーマなど

方針	テーマ	主なアクションプログラム・取組
１　多文化・多世代共生のまちづくりによる，新たな向島のイメージ発信 ～誇るべき歴史・自然環境，更には小中一貫教育校創設等による教育環境をアピール～	１　歴史・文化・農業・自然環境の「資源」によるまちのイメージづくりとツーリズムの実施 ２　多文化・多世代共生を目指したまちづくりのための拠点づくり ３　向島のイメージづくりに資する情報発信	○歴史等の「資源」を情報発信し，新たな向島のイメージ付け （小中一貫校創設による教育環境の魅力向上も期待）
２　魅力のある住宅・住環境づくり ～将来にわたって安心して住み続けられ，外から来ても住みたくなる住環境を整備～	４　若者・子育て世代から高齢者世代まで全ての世代のニーズを踏まえた住宅の魅力・機能の向上 ５　共用施設の再生・バリアフリー化によるまちの魅力向上	○市営住宅子育て世帯向けリノベーション ○市営住宅空き家を活用した学生や事業者等の入居 ○四季折々の修景を有し，市内外から訪れたくなる，癒しの場としての向島中央公園等の再整備
３　安心して子育てができるまちの仕組みづくり ～子育て世帯にとって魅力的な，充実した教育環境や子育て支援の仕組みづくり～	６　子どもの可能性を広げるための環境と仕組みづくり ７　まちぐるみでの子育て支援の仕組みづくり	○学生センター留学生などと子どもたちとの交流 ○子ども食堂，学習支援の取組充実
４　誰もが活き活きと生活できるまちの仕組みづくり ～高齢者・障害者・中国帰国者等も活き活きと暮らし，みんなでまちづくり～	８　高齢者・障害者の生活課題に対応した取組 ９　中国帰国者等，日本語を母語としない人たちの生活課題解決に向けた取組 １０　まちづくりの気運を高める市民参加型プロジェクト実施	○街区集会所等における高齢者サポート拠点づくり ○中国帰国者等と地域住民のサポーターとのネットワークづくり
５　きめ細やかな防災・防犯のまちづくり ～要支援者も含めて全ての住民が安心できる防災防犯の取組～	１１　災害避難に必要な情報共有と環境整備 １２　まちへの関心を高め，住民が共に見守り，参加する防犯・交通安全活動	○災害情報発信のバリアフリー化
６　便利で賑わいのあるまちづくり ～既存の商店街・交通機能・用地等の更なる有効活用による活性化～	１３　賑わい・商業施設の充実 １４　向島ニュータウンの特性と状況を踏まえた交通機能の整備 １５　住まうだけでなく，働くことができる場づくり	○向島センター商店街や駅前の活性化
７　向島の将来を展望した土地利用等の見直し	１６　向島二の丸小学校・向島中学校敷地を始めとする用地の活用とこれに伴う土地利用計画の見直し １７　公営住宅を始めとするニュータウン内住宅全体のあり方の検証	○小中学校敷地を始めとする用地の活用を検討 ・多文化・多世代のまちづくりを進めるための交流拠点 ・子育て世代流入の受皿としての分譲住宅 ・住まいの近くで働ける場 ○コミュニティミックスの観点を踏まえたニュータウン内住宅全体のあり方の検証

Ⅴ　推進体制



○全取組主体として「推進会議」を設置し，住民主体の取組の支援等を通じて，まちづくりを担う地域の人材の発掘や，地域主体の組織づくりが円滑に進むよう，協働して取り組んでいきます。
○将来的には，地域住民は，自らのまちのことは自らが担い，まちづくりの意思決定の場に参加していくという「住民主体」の姿勢の下，事業者と協働し，取組を進める体制（まちづくり組織）を構築するよう努めます。
○これに対して行政（京都市）は，地域（住民・事業者）によるまちづくり組織の主体性を尊重しつつ，パートナーシップにより，まちづくりの取組を進めていきます。

１　まちづくりビジョンの進行管理等を行う「推進会議」の設立
まちづくりビジョンの進行管理及びアクションプログラム継続検討分の検討や取組支援（人材育成・組織づくりの支援も含む。）を行う「推進会議」を，平成２９年４月に地域団体・住民組織・事業者・教育機関・行政が協働して参画し，設立します。

２　まちづくりビジョンに基づく住民主体の取組の支援
地域主体の活動の立上げや取組の初動期を支援する助成制度を創設します。

３　ニュータウン３学区の地域団体・住民組織が中心となった向島ニュータウン（地域）全体の「まちづくり組織」の設立
向島ニュータウン（地域）全体のまちづくりを住民主体で，京都市とパートナーシップを組んで推進するため，ニュータウン内３学区（ニュータウン外の向島・向島南学区とも連携）の地域団体・住民組織を中心とした「まちづくり組織」の設立を計画期間内に目指します。

３　向島ニュータウン概要

【概要】

向島ニュータウンは，京都市が施行する新都市として昭和 46（1971）年に計画決定され，昭和 52（1977）年にまちびらきがされました。

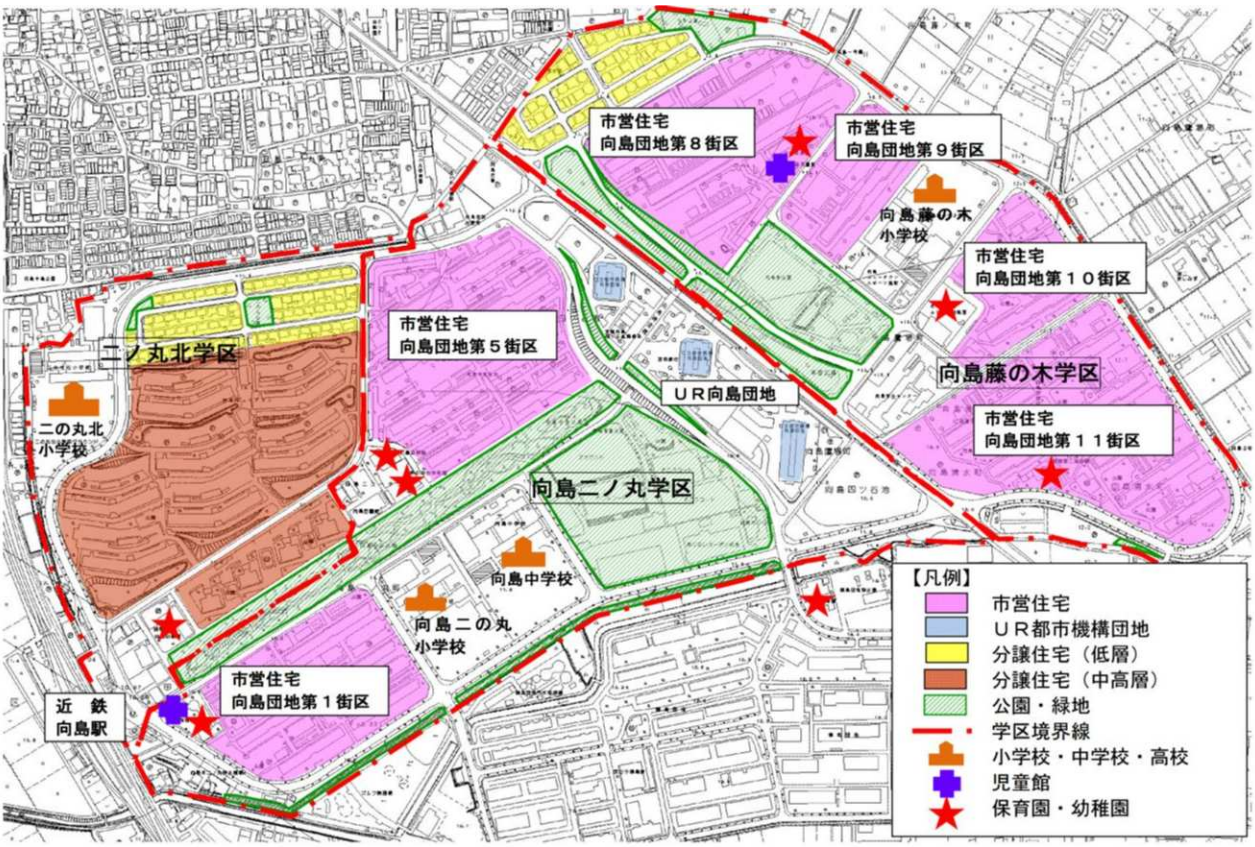
●事業手法：一団地の住宅施設（京都市住宅供給公社施工）
●面積：74.7ha
●計画戸数・人口：6,810 戸・22,500 人
●建設戸数：6,565 戸
　　内訳：市営住宅 4,257 戸（64.8%），ＵＲ賃貸住宅 624 戸，分譲住宅（高層）1,441 戸，
　　分譲住宅（戸建）243 戸
●開発の経緯

昭和 52（1977）年	2 街区・5 街区から入居開始，近鉄バス営業開始
昭和 53（1978）年	中央公園（西，東），センター商店街，医院等開業
昭和 54（1979）年	近鉄向島駅開業，向島二の丸小学校開校
昭和 55（1980）年	向島中学校開校
昭和 58（1983）年	向島藤の木小学校開校
昭和 59（1984）年	向島東中学校開校
昭和 61（1986）年	市立向島図書館開設，二の丸北小学校開校
昭和 62（1987）年	11 街区竣工を以て事業完了
平成 2（1990）年	向島学生センター開設
平成 20（2008）年	第 1 回向島駅前「春の祭典」（平成 22（2010）の第 4 回以降「秋の祭典」として継続）
平成 25（2013）年	コミュニティスペース「京都文教マイタウン向島（ＭＪ）」開設， 向島ニュータウン駅前健康福祉のまちづくりアンケート実施（向島二ノ丸学区，二の丸北学区）
平成 27（2015）年	向島まちづくりアンケート実施（向島藤ノ木学区）

●現世帯数・人口：5,968 世帯・12,464 人
　　割合 15 歳未満 9.0%（全市 11.0%），65 歳以上 36.4%（全市 25.8%）
　※　平成 27 年国勢調査による

●特徴
・　道路や公園・緑地などの都市基盤が整備されています。
・　市営住宅，ＵＲ都市機構団地のほか，分譲住宅（低層，高層）が立地しています。
・　小学校，中学校のほか，保育園，幼稚園，児童館といった教育・福祉施設や，図書館等の公共施設が総合的に整備されています。
・　周辺には「京都文教大学（宇治市）」，「種智院大学（伏見区）」が立地しています。

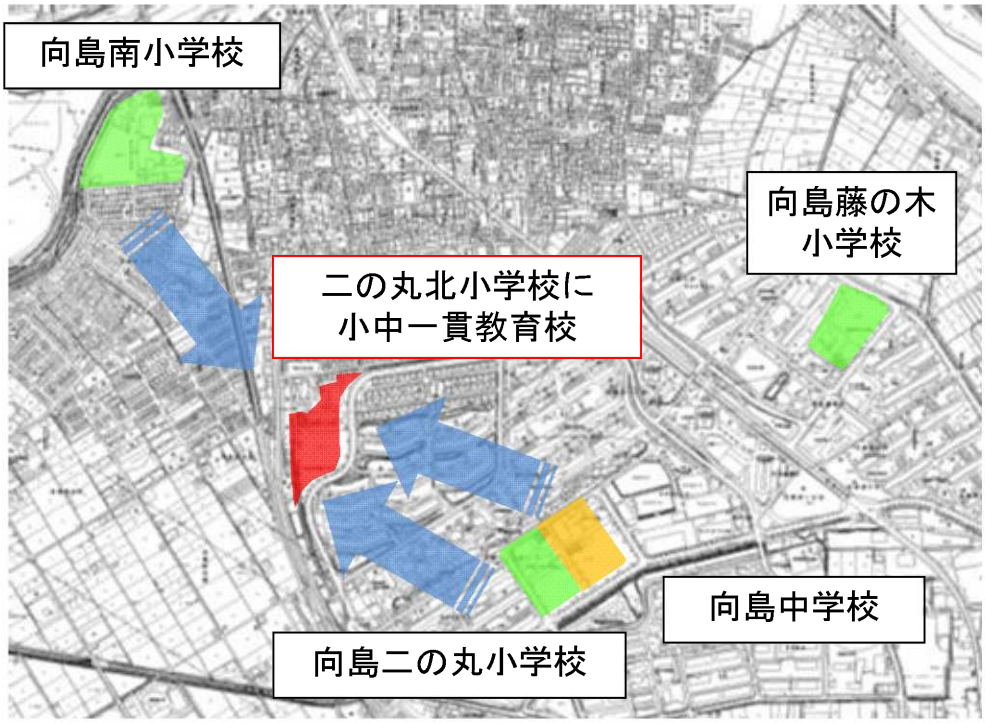
向島ニュータウン全体図



【小・中学校の概要】

向島ニュータウンには，二の丸北小学校，向島二の丸小学校，向島藤の木小学校の 3 つの小学校と向島中学校があります。

向島南・向島二の丸・二の丸北小学校の統合校と向島中学校を一体化した小中一貫教育校の新設を求める地元からの要望書（平成 26 年 7 月提出）を踏まえ，平成 31 年度をめどに現二の丸北小学校敷地に小中一貫教育校新校舎を整備する計画が進められています。



小学校児童数の推移

	最大児童数		平成 28 年
向島南小学校	1,041 人	昭和 57 年	400 人
二の丸北小学校	622 人	昭和 62 年	72 人
向島二の丸小学校	1,177 人	昭和 61 年	185 人
向島藤の木小学校	861 人	平成 4 年	189 人
合　計	3,701 人		846 人

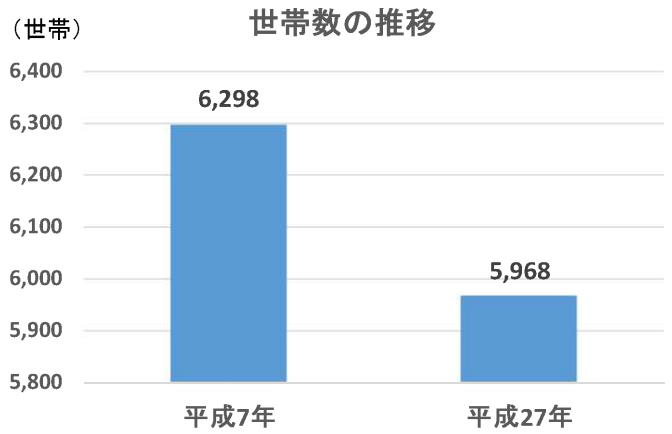
資料：京都市教育委員会

4　向島ニュータウンの現状・課題と資源

人口・地域力に関わること

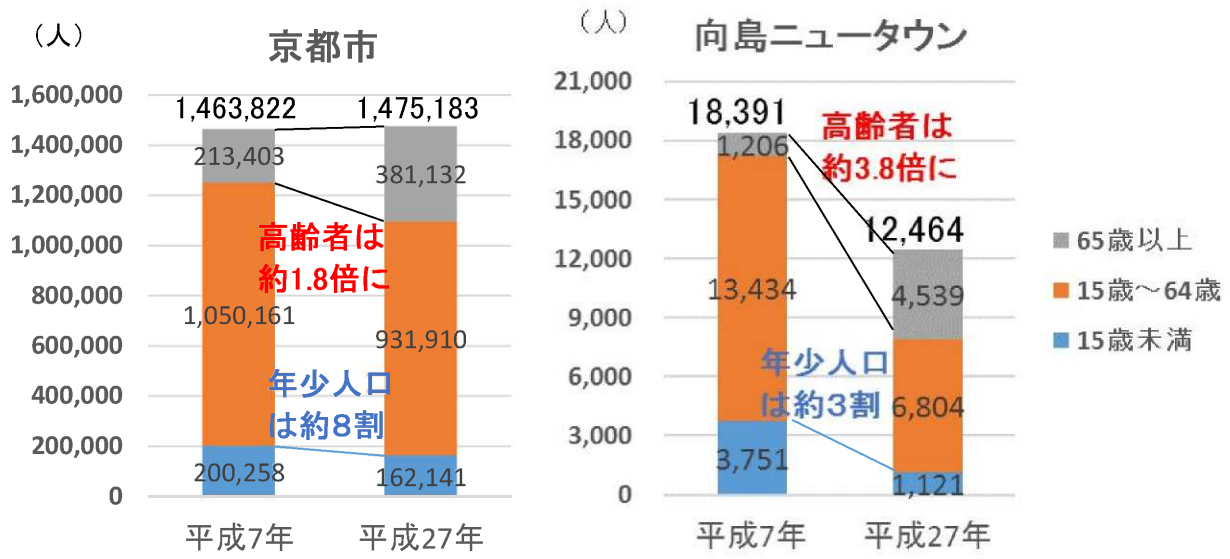
（１）現状

〇向島ニュータウン内の学区では，平成 7 年と平成 27 年を比較した場合，世帯数が減少しています。また，急激な人口減少に加えて，65 歳以上人口の数は約 3.8 倍に増加，15 歳未満人口の数は約 3 割に低下しています。



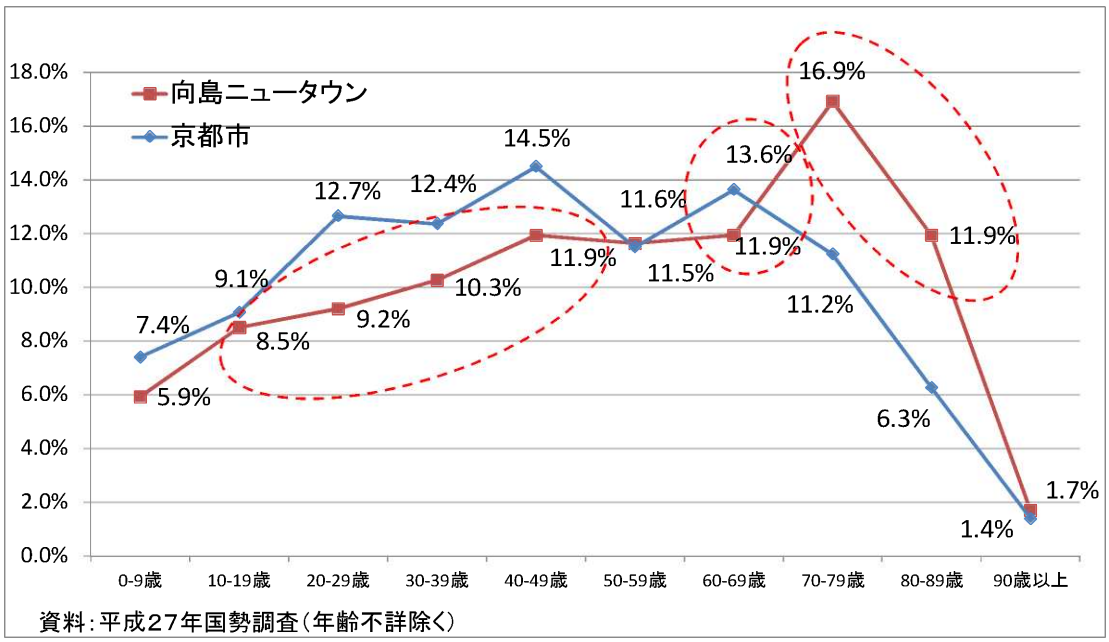
資料：国勢調査

年齢層別人口の推移



資料：国勢調査

○近年では，高齢化が進行し，市全体と比較して，70 歳～89 歳の割合が高い一方で，60～69 歳の割合は市全体よりも低くなっており，このまま推移すると今後は高齢人口も減少していく状況にあります。また，10 歳～49 歳までの人口は市全体よりも割合が低い状況です。



（２）課題

①人口減少・少子高齢化が全市域の平均を大きく上回るペースで進行

京都市では，「まち・ひと・しごと・こころ京都創生」総合戦略（平成 27 年 9 月）を策定し，人口減少の歯止めに資する各種関係施策・事業等を実施することにより，人口減少社会の克服，東京一極集中の是正を目指しています。

向島ニュータウンでは，人口減少・少子高齢化が全市域の平均を大きく上回るペースで進行しています。向島ニュータウンならではの資源や強みを活かし，若い世代や子育て層が住みたいと思う魅力を高め，人口減少の歯止めとなることが課題となっています。

②人のつながりの希薄化と支え合いの力の低下

人口減少・少子高齢化の急激な進行により，コミュニティが希薄化しており，人のつながりが弱まっています。高齢者・障害者・子育て層・中国帰国者等，孤立している住民の増加が危惧されています。経済面などの困難さを抱えるひとり親世帯，コミュニケーションや生活文化の違いから孤立しがちな中国帰国者等について，地域ぐるみの生活支援が課題となっています。

まちづくりアンケート調査結果より

近所づきあいの程度について，「特におつきあいはない」回答が 16.6%となっており，地域の中で孤立が生じていることがうかがわれます。「一日中話さない」が 26.5%，「一日中，出かけない」が 46.7%，「さびしいと感じることがある」が 17.6%，「相談できない」が 18.0%となっており，人のつながりづくりが求められています。

（「向島ニュータウンまちづくりアンケート調査結果報告書，平成 28 年 3 月」）

③ニュータウン全体のまちづくり推進体制づくり

向島ニュータウンには，3 つの学区全体のまちづくり活動を担う組織がありません。住民組織の活動は縦割りになりがちであり，学区間の連携が弱い状況です。新しい人材の発掘やメンバーの世代交代は共通の課題であり，ニュータウン全体のまちづくり推進体制を整備すると共に，担い手の参加促進を図ることが求められています。

また，行政との連携を図り，協働の取組を進めていくためにも，ニュータウン全体のまちづくり推進体制づくりが課題となっています。

（３）資源・強み

①地域に根ざしたまちづくりの活動

向島ニュータウンには自治活動の他に，学区社協，民生委員，事業者による高齢者や障害者を支える活動，自主防災組織を中心とした防災活動など，住民による，地域に根ざした活動が続けられています。

ニュータウン全体の住民の交流，健康・福祉のまちづくりイベント「秋の祭典」は 10 回目を迎え，まちづくりにかかる諸団体のネットワークが広がっています。また，京都文教マイタウン向島（ＭＪ）では，大学と地域住民によるまちづくりの活動が取り組まれています。

秋の祭典の様子

ＭＪで開催されている「向島団地大学ミニゼミ」

②向島ニュータウンならではの住民のいろいろな柄

「話し合う集い」において，向島ニュータウンの魅力は「多文化・多世代の住民によるいろいろな柄があること」が挙げられていました。中国帰国者や留学生などによる多国籍の活動は他のまちにはないものであり，向島ニュータウンならではのまちの魅力となる可能性を持っています。

ペルーのダンスサークル

秋の祭典での中国帰国者二胡演奏

まちの機能や公共施設に関わること

（１）現状

〇向島ニュータウンには計画的に整備された，道路や公園・緑地などの都市基盤ストックがあります。
〇市営住宅，ＵＲ都市機構団地のほか，分譲住宅（低層，高層）といった住宅ストックが立地しています。
〇小学校，中学校のほか，保育園，幼稚園，児童館といった教育・福祉施設や，図書館等の公共施設が総合的に整備されています。

（２）課題

①公園や住棟周りの公共空間の老朽化に伴う再整備

中央公園は 40 年を経て，市民の清掃活動や水辺環境の改善により蛍が生息するなど豊かな森を形づくっています。一方で施設の老朽化や低木が茂りすぎて視界が遮られるなど防犯面の問題も指摘されています。

住棟周りの共用空間についても老朽化が進んでおり，駐輪場やエレベーターホール周り，ゴミ収集所など，住民のニーズに対応した住棟周りの共用空間の再整備が課題となっています。

中央公園と歩道

②改修や耐震化などの居住環境の更新，再整備

分譲住宅では老朽化に伴い耐震診断や改修が，公営住宅ではそれらに加えて，浴室などの設備更新が課題になっています。誰もが安心して住み続けることができる，若年世帯や子育て層の流入促進につながる魅力づくりのために，居住環境の更新や再整備の検討が必要になっています。

③若年・子育て世代の受け皿住宅の不足

市営住宅は空き家が発生しているものの入居制限があり，かつ，仕様がこれまで建設当初と大きく変更されていなかったこと，また，分譲住宅は空き家が少ないといったことから，若年世帯や子育て層の受け皿が少ない状況になっています。このため，京都市では「子育て世帯向けリノベーション住宅（10 戸，平成 29 年度）」を実施しており，更なる，若者・子育て世代の受け皿確保の取組が求められています。

④街区・学区を越えたコミュニティ拠点の不足

コミュニティの拠点として，街区集会所や図書館，京都文教マイタウン向島（ＭＪ），向島学生センターが活用されていますが，街区・学区を越えて集うことができる拠点が不足しています。ニュータウン全体のまちづくり活用を活性化させていくために，現在活用しきれていない既存の施設や拠点等の有効活用も含め，街区・学区を越えたコミュニティ拠点の確保が課題となっています。

⑤市営住宅の空き家発生

市営住宅の空き家（約 600 戸）が発生しており，今後も増加が見込まれます。コミュニティミックスの視点から入居制限を見直し，向島ニュータウンの活性化の資源として市営住宅の空き家を活用していくことが課題となっています。

公的賃貸住宅の空き住戸の状況（平成 27 年４月時点）

	管理戸数	空き住戸数	空き家率
市営住宅	4,257	574	14%
ＵＲ賃貸住宅	624	約 50	5～10%

平成 27 年度向島市営住宅公募戸数：138 戸（公募倍率 1.4 倍）

（３）資源・強み

①計画的に整備された住宅や都市基盤のストック

住民による管理によって，蓮が咲き，蛍が自生する中央公園，防災公園の機能を備えた東公園，管理組合などが自主的に管理している街区公園など，協働の取組によって維持された自然豊かな公園があります。

自治会や管理組合の活動によって住環境や街区集会所などが維持管理されています。これらの計画的に整備された居住環境のストックに加えて，学校敷地や公社所有の未利用地が将来的なまちづくりに活用できます。

②国際色豊かな暮らし

中国帰国者等の外国籍の住民，学生センターの留学生など，国際色豊かな暮らしがあることが，向島ニュータウンならではの特徴となっています。

③子育て層を引きつけることにつながる教育・子育て環境

向島ニュータウンには保育園，幼稚園，児童館等の豊かな子育て支援拠点が立地しています。更に，小中一貫校が平成 31 年度開校予定であり，新たな教育環境の下，子育て世代の流入促進につながる可能性を備えています。

子育て支援拠点

分　類	施設名	学　区
保育園	野の百合保育園	向島二の丸小学校
	城南保育園，城南第二保育園	向島藤の木小学校
認定こども園	白菊こども園	向島二の丸小学校
幼稚園	向島幼稚園	二の丸北小学校
		向島二の丸小学校
	ふじのき幼稚園	向島藤の木小学校
児童発達支援事業所	空の鳥幼児園	向島二の丸小学校
児童館	白菊児童館	向島二の丸小学校
	城南児童館	向島藤の木小学校

利便性・暮らし心地に関わること

（１）現状

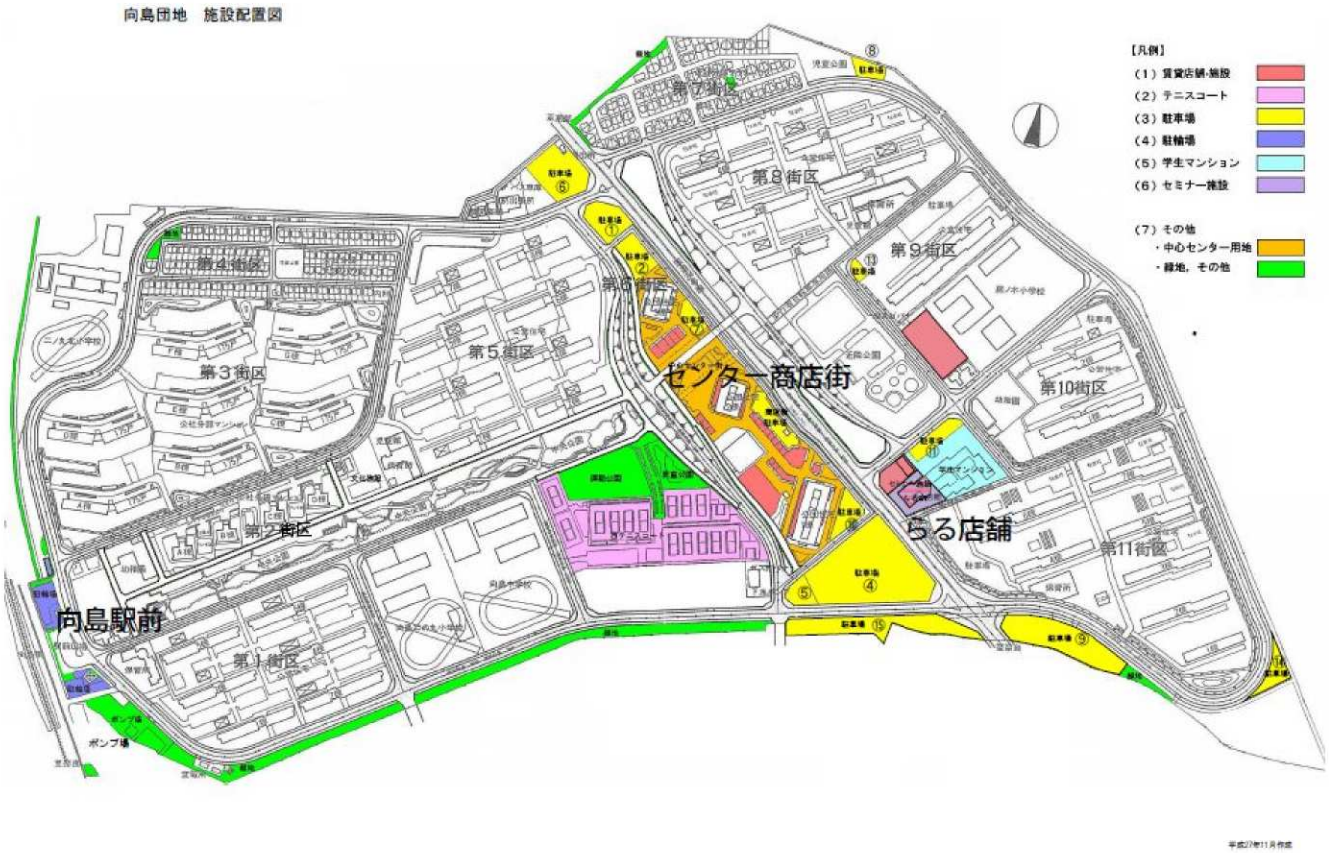
○タウンセンターには，生鮮食料品を扱うスーパー，専門店や飲食店で構成された商店街が立地しており，生活を支えています。

○向島ニュータウンには，近鉄向島駅に加えてバス交通といった公共交通機関が整備されています。

○安心して暮らし続けるために，高齢者や障害者の生活を支える医療介護施設が立地しており，住民が中心となった見守りや集いの場づくりなどの活動と連携しています。

○言葉や生活習慣の面で問題を抱える中国帰国者のために，当事者組織が活動しています。ひとり親家庭など子育て世帯の生活を支援するために，地域ぐるみで学習支援や子ども食堂の取組がされています。

○向島ニュータウンや周辺地域は水害の危険性を抱える地域であり，災害に備えて自主防災組織が活動しています。



（２）課題

①安心して暮らし続けるための商店街等の活性化

昭和 53 年にセンター地区に利便施設として，購買施設（個人店舗，市場，スーパー等），金融機関が一斉に開設されましたが，少子高齢化によるニュータウン内での購買力低下により，空き店舗が増加し，結果，全体的な集客力も低下するという悪循環に陥っています。

タウンセンターは空き店舗が発生しており，玄関口である駅前は商業施設が十分ではありません。また，24 号線の東には購買施設が不足しており，住民要望を受けて平成 25 年度にコンビニエンスストアが誘致され，開店しましたが，十分ではありません。

安心して暮らし続けるための商業機能の検討や，若者・子育て世代に魅力的な商店街等の活性化が課題となっています。

日曜日午前中の商店会

②安心・安全に歩ける，外出できる交通

公共交通が整備されていますが，目的地や街区等によって不便が生じています。なかでも，バス交通については，利便性を高めるために，便数やルート，バリアフリー対応について，ニーズに対応した見直しが必要になっています。

> **まちづくりアンケート調査結果より**
>
> 通院の方法では「電車（35.1%）」が最も多く，「自家用車（27.2%）」「自転車（26.0%）」が続いており，「バス」は 5.5%となっています。高齢化の進行と共に，交通手段は自家用車から公共交通への移行が予想されることから，ニーズに応じた移動支援策が必要になります。
>
> （「向島ニュータウンまちづくりアンケート調査結果報告書，平成 28 年 3 月」）

③誰もがその人らしく住み続けることができる体制づくり

高齢者，障害者，子育て層，中国帰国者等など，誰もがその人らしく住み続けることができる地域包括ケアの取組みが求められています。中でも中国帰国者等の生活支援や防災，子どもの貧困対策について喫緊の取組が課題となっています。

> **まちづくりアンケート調査結果より**
>
> 向島ニュータウンが目指すべきまちづくりでは「元気な高齢者が住める（34.8%）」が最も多く，「防犯・防災（30.4%）」「要介護者や障害者が安心して暮らせる（27.7%）」「地域包括ケア（25.8%）」が続いています。誰もがその人らしく住み続けることができることが求められています。
>
> （「向島ニュータウンまちづくりアンケート調査結果報告書，平成 28 年 3 月」）

④人をつなげる防災や情報発信

地震や水害に備えるために，災害情報の提供や避難行動・避難場所の準備，日常の支え合いなどの取組が課題となっています。

人をつなげていく，まちづくりに参加してもらうために，まちづくり活動についての情報発信が課題となっています。

（３）資源・強み

①若者・子育て世代に魅力的な立地性，暮らしやすさ

交通至便であること，子育て支援サービスがあることなど，若者・子育て世代にとって魅力的な立地性や子育てしやすさを備えていることは向島ニュータウンの強みとなっています。

②安心して住み続けることができるまち（地域包括ケア）の取組

高齢者や障害者の生活を支える医療介護施設が立地していること，住民が中心となった見守りや集いの場づくりの活動があることなど，安心して住み続けることができるまちを目指す上での資源となっています。

③京都文教大学による地域放送局での情報発信と活用の可能性

京都文教大学ではＦＭラジオ番組を作成する学生サークルが活動しており，向島ニュータウンを拠点としたまちづくり情報の発信が進められています。

まちづくり活動の情報発信を充実させることで，人をつなげていく，まちづくりに参加してもらうことにつながり，まちづくりが活性化する可能性が高まります。

地域包括ケア会議の様子

京都文教大学 学生放送局 SHERPA

立地性に関わること

（１）現状

○向島ニュータウンは，安土・桃山時代に伏見城と共に築かれた向島城や，治水や干拓の歴史を備えた巨椋池，宇治川水辺の自然環境や歴史景観を備えています。しかし，これらの豊かな資源があることは住民に知られておらず，まちのイメージづくりにつながっているとはいえません。

○向島駅があるなど市内及び大阪方面への交通至便性があり，若者・子育て世代の流入・定着を図る上で有利な立地性といえます。

（２）課題

①イメージ付けのための情報発信・魅力発信の不足

向島ニュータウンは，向島城や巨椋池など，子ども達や住民にとって誇りとなる歴史資源を備えているものの，まちのイメージに必ずしもつながっているわけではありません。誇りをもって向島に住み続けることができるように，これらの資源を学ぶ機会づくりや情報発信が課題となっています。

②若者・子育て世代へのＰＲ不足

まちの情報発信やＰＲが不足していることから，対外的な向島ニュータウンの認知度は高くありません。向島ニュータウンが京都市外からの人口の流入・定着の受け皿となるよう，まちの魅力について若者・子育て世代に対してＰＲしていくことが課題となっています。

③職住近接型のニュータウンに向けた働く場づくり

若者・子育て世代の流入・定着のためには，住まいに加えて働く場が求められます。なかでも，ひとり親世帯については，身近な就労場所が不可欠になります。向島ニュータウンの再生では，職住近接型のニュータウンに向けた働く場づくりが課題となっています。

（３）資源・強み

①向島城などの歴史文化

向島ニュータウンには，秀吉が伏見城の向かいに築いた向島城があり，桃山文化の舞台となった歴史資源を備えています。歴史・文化情報を発信していくことで，外から訪れる人を増やしていくことが期待できます。

②巨椋池などの豊かな農や景観資源

大規模農地である巨椋池は，治水や干拓の歴史があり，水辺の自然環境や大規模な農地，太閤堤や集落景観といった向島ならではの景観を備えています。これらの資源を向島ニュータウンのイメージづくりに活かしていくことが考えられます。

ニュータウン周辺の農地

宇治川河川敷

③近鉄電車等による京都市内や大阪への交通至便性

交通至便で京都や大阪，奈良等の働く場に近いことは，若者・子育て世代に限らず，各世代にとって魅力的な立地性を備えており，向島ニュータウンの強みとなっています。

５　向島ニュータウンのまちづくりの方向性

【まちづくりビジョンの位置づけ】

まちづくりビジョンは，向島ニュータウンがこれから目指すまちの姿を示し，住民，事業者，行政が共有したうえで，実現するための方針やテーマ，今後４年間（平成 29（2017）～32（2020）年度）で具体的に検討，または取り組んでいくアクションプログラムについて記載します。なお，アクションプログラムと具体的な取組については，継続検討が必要なものや将来的な構想段階のものも多数あり，今後も引き続き検討していくものも含んでいます。

【向島ニュータウンの目指すまちの姿】

誰もが　活き活きと暮らせる　向島ニュータウン
～暮らし心地を誇れる「多文化※注・多世代共生」のまち～

※注：　ここで言う「多文化」には，国際的な文化だけでなく，障害者等，様々な方々の多様な生活文化も含みます。

留学生や中国帰国者，在日外国人などさまざまな国籍や文化を持つ人，地域で活動する障害者，いろいろなサークルに集う高齢者，スポーツチームでがんばる親子など多彩な人たちが暮らす多文化・多世代のまちである向島ニュータウン。その特色をいかし，多様な文化と多様な世代，そして１人ひとりが尊重され，まちづくりに参画し，誰もが活き活きと暮らすことができるまちを目指します。

まち全体で子どもと親を大切にする取組や若い世代が住まうことができる住環境や教育環境を整えることで，若者・子育て世代が移り住み，定着するコミュニティ豊かで持続可能なまちにしていきます。

また，住民・事業者・行政が一緒になって，様々な困難を抱える住民の暮らしを支えていくことで，命が大切にされ，誰にとっても安心・安全で暮らし心地のよいまちにしていきます。

そして，向島周辺にある市内屈指の農地や自然豊かな住環境・そして向島城を始めとする歴史文化など「向島の資源」を大切にした向島ならではのまちづくりを進め，暮らす・生活するだけの「ベッドタウン」から向島らしいひとりひとりが自分らしい暮らし方を目指すことができる「ライフタウン」，さらには誰もが活き活きと暮らす「ライブタウン」へとまちを変えていきます。

【まちづくりの姿勢】

地域の力を引き出し，高めあいながら，自らのまちのことは自らが担うという姿勢のもと，一人ひとりの住民や住民組織・地域団体，事業者，教育機関，行政など，向島ニュータウンに関わる全ての主体がそれぞれの役割をもって共に連携・協働して，まちづくりビジョンの目指すまちの姿の実現に向けて取り組んでいきます。

そのために，住民を始めとし各主体がまちづくりの意思決定の場に参加すること，向島の「資源」をうまく活かしながら，さまざまな関連し合う課題を同時に解決していくことができる環境整備や仕組みづくりを行っていきます。